

## 遙かなるマカオ ～ 創刊 200 号に寄せて

藤井 達也

私がマカオを何故「遙かなる」と呼ぶのか、不議に思われた方もおられるのではないのでしょうか。何せマカオは関空発の直行便に乗れば、4時間程度で到着するのですから。これには、次の2つの理由があります。



1つは、かなり昔に香港へ行った際、マカオまでのフェリーのチケットを買い求め、いざ乗り込もうとしたら、ある理由から乗船を断念せざるを得なかった経験があるからです。

もう1つは、アジア関係図書館（分館）の閲覧室に配架されている1冊の本を偶然手に取り、以前に行く事が出来なかったマカオがこんなに素晴らしい所だと知り、更に興味を持つようになったからです。マカオはもはや、私にとって憧れの地となってしまいました。

ところで、自分が行った事もない国の紹介をしようとするのですから、無謀と言え無謀ですね。しかしこれは父親譲りの性癖の様です。私の父は50年ほど前にイタリアに1年間滞在していたのですが、その時に自分が行った事もない観光地へガイドブック片手に、来客を案内して回ったというのですから驚きです。

さてマカオと言えば、真っ先に何を思い浮かべるのでしょうか？ やはりカジノでしょうか。マカオは世界でも有数のカジノ王国というのは、誰でも知っているところです。



しかし生憎、私にはカジノには何の関心もありません。では、他の何に惹かれているのでしょうか？ それを一言で表せば、マカオが歴史と共に育んだ文化と言えるでしょう。

では、マカオが辿った歴史について簡単に振り返ってみましょう。マカオは元々、静かな漁村でした。しかし明（1368～1644）の時代にポルトガルがアジア進出を始めると、事態は一変します。様々な経緯の後、1543年頃にはマカオで貿易が始まります。更にザビエルが布教を始めたため、マカオは明や日本、ヨーロッパとの貿易の中継点として、また、キリスト教の布教の拠点として繁栄する事になります。更にポルトガルはマカオで議事会を設立し自治を行い、1623年には初代マカオ総督が就任します。

ポルトガルが一番困っていたのは明の時代か

ら続く毎年の土地租借料でした。これを色々な口実で踏み倒し、マカオを植民地として割譲する事を謳った「日葡友好通商条約」を1887年に締結しました。

マカオがポルトガルから返還されたのは、1999年12月20日の事でした。因みに香港がイギリスから返還されたのは1997年7月1日でした。香港が返還された時は大きく報道されたのに対し、マカオが返還された時は殆ど話題に上らないほど静かであったと記憶しています。

この様にマカオはポルトガルから440年以上もの間に亘って影響を受けて来たのですから、それが様々な所で色濃く残っています、いや、残っている様です。

さて、本稿を執筆するに当たって参考図書として利用した図書を3冊挙げる事にしましょう。いずれも分館に配架されています。

1. 地球の歩き方編集室著作編集『マカオ '12～'13』（地球の歩き方 D33）ダイヤモンド・ビッグ社 2012 資料ID：568737

最近のガイドブックには、歴史のページがない物がありますが、本書には「マカオを知ろう」というコーナーが巻末に付されていて、概略を知る事が出来ます。更に「読んでおきたいマカオ関連の本」も便利です。

2. 東光博英『マカオの歴史: 南蛮の光と影』大修館書店 1998 資料ID：452261

本書の著者は、本学で教鞭を執っておられる東光先生です。16～17世紀の繁栄するマカオについて述べられています。

3. 芹澤和美著、安藤“アン”誠起写真『マカオ ノスタルジック紀行』双葉社 2007 ID:522021



冒頭でご紹介した図書は、こちらです。「はじめに」を読んだだけで、まだ行った事のないマカオにどっぷり浸れます。

左の写真はマカオにあるエッグタルトの店先を、他の写真と同様、家内が撮影した物ですが、この店の事は本書（pp.56-57）にも紹介されています。そして何と、同じエッグタルトが京都の寺町通り錦上ル東側の店舗で販売されているのを知りました。これを食べれば、京都に居ながらにしてマカオの雰囲気味わえる事、請け合いですよ。

ふじい たつや(司書・係長・アジア関係図書館)